

研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 5 9	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
<p>Binge drinking during pregnancy as a predictor of psychiatric disorders on the Structured Clinical Interview for DSM-IV in young adult offspring. 妊娠中の多量飲酒は胎児の DSM-IV 診断による青年期精神障害の予測因子である</p>	
執筆者	
Helen M. Barr, Fred L Bookstein, Kieran D. O'Malley, Janet E. Huggins, Ann P. Streissguth	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Psychiatry 2006;163:1061-1065	
キーワード	
胎児、アルコール暴露、青年期、精神障害、性格障害	
要 旨	
(目的)	
胎内アルコール暴露の臨床症状のある者では青年期の精神障害の頻度が高いことが知られている。本研究ではこの関連が臨床症状のない集団でも認められか、また精神障害と胎内でのアルコール暴露が関連するか検討する。	
(方法)	
1529 人の妊婦を対象とした長期前向き研究から、多量飲酒と連続飲酒暴露を含む 500 名の新生児を選び、平均 25.7 歳時に 400 人に DSM-IV の質問法を行った。AXIS I と AXIS II 人格障害の質問法も含めて行った。ほとんどの母親は精神症状の既往を持たなかった。	
(結果)	
胎内アルコール暴露の既往歴がある者では、青年期に 6 つの精神障害や性格障害をもつ危険が 2 倍以上であった。そのうち、AXIS I 薬物依存、AXIS II 受動攻撃性人格、反社会的人格の 3 つは交絡因子を調整しても、関連が変わらなかった。	
(結論)	
臨床症状を伴わないレベルにおいても、胎内でのアルコール暴露は青年期の精神障害や性格障害危険因子となる。	